

風琴と魚の町

林芙美子

青空文庫

1 父は風琴を鳴らすことが上手であつた。

音楽に対する私の記憶は、この父の風琴から始まる。

私達は長い間、汽車に揺られて退屈していた、母は、私がバナナを食んでいる傍で經文を誦しながら、泣いていた。「あなたに身を託したばかりに、私はこの様に苦労しなければならぬ」と、あるいはそう話しかけていたのかも知れない。父は、白い風呂敷包みの中の風琴を、時々尻で押ししながら、粉ばかりになつた刻み煙草を吸っていた。

私達は、この様な一家を挙げての遠い旅は一再ならずあつた。

父は目蓋をとじて母へ何か優しい氣に語っていた。「今に見いよ」とでも云っているのであろう。

蛭々とした汀を汽車は這っている。動かない海と、屹立した雲の景色は十四歳の私の眼に壁のように照り輝いて写つた。その春の海を囲んで、たくさん、日の丸の旗をかかげた町があつた。目蓋をとじていた父は、朱い日の丸の旗を見ると、せわしく立ちあがつて汽車の窓から首を出した。

「この町は、祭でもあるらしい、降りてみんかやのう」

母も経文を合財袋がつさいぶくろにしまいながら、立ちあがった。

「ほんとに、綺麗な町じや、まだ陽が高いけに、降りて弁当の代でも稼かせぎまっせ」

で、私達三人は、おのおのの荷物を肩かたに背負つて、日の丸の旗のヒラヒラした海辺の町へ降りた。

駅の前には、白く芽立つた大きな柳やなぎの木があつた。柳の木の向うに、煤すすで汚れた旅館が二三軒並んでいた。町の上には大きい綿雲が飛んで、看板に魚の絵が多かつた。

浜通りを歩いていると、ある一軒の魚の看板の出た家から、ヒュツ、ヒュツ、と口笛くちぶえが流れて来た。父はその口笛を聞くと、背負つた風琴を思い出したのであろうか、風呂敷包みから風琴を出して肩にかけた。父の風琴は、おそろしく古風で、大きくて、肩に掛けられるべく、皮のベルトがついていた。

「まだ鳴らしなさるな」

母は、新しい町であつたので、恥はずかしかったのであろう、ちよつと父の腕うでをつかんだ。

口笛の流れて来る家の前まで来ると、鱗まびれになつた若い男達うしろこが、ヒュツ、ヒュツ、と口笛に合せて魚の骨を叩たたいていた。

看板の魚は、青笹あおやぎの葉を鰓あぎとにはさんだ鯛たいであつた。私達は、しばらく、その男達が面

白い身ぶりでかまぼこをこさえている手つきに見とれていた。

「あにさん！ 日の丸の旗が出ちよるが、何事ばしあるとな」

骨を叩く手を止めて、眼玉の赤い男がものうげに振り向いて口を開けた。

「市長さんが来たんじゃ」

「ホウ！ たまげたさわぎだな」

私達はまた歩調をあわせて歩きだした。

浜には小さい船着場がたくさんあった。河のようにぬめぬめした海の向うには、柔かい島があつた。島の上には白い花を飛ばしたような木がたくさん見えた。その木の下を牛のようなものがのろのろ歩いていた。

2 ひどく爽やかな風景である。

私は、蓮根れんこんの穴の中に辛子からしをうんと詰めて揚げた天麩羅てんぷらを一つ買った。そうして私は、母とその島を見ながら、一つの天麩羅を分けあつて食べた。

「はようもどんないよ、売れな、売れんでもええとじやけに……」

母は仄かな侘しきを感じたのか、私の手を強く握りながら私を引っぱって波止場の方へ歩いて行つた。

肋骨のように、胸に黄色い筋のついた憲兵の服を着た父が、風琴を鳴らしながら「オイチニイ、オイチニイ」と坂になった町の方へ上つて行つた。母は父の鳴らす風琴の音を聞くとうつむいてシユンと鼻をかんだ。私は呆んやり油のついた掌を嘗めていた。

「どら、鼻をこつちい、やつてみい」

母は衿にかけていた手拭を小指の先きに巻いて、私の鼻の穴につつこんだ。

「ほら、こぎやん、黒うなつとるが」

母の、手拭を巻いた小指の先きが、椎茸のように黒くなった。

町の上には小学校があつた。小麦臭い風が流れていた。

「こりや、まあ、景色のよかとこじや」

手拭でハタハタと鬚の上の薄い埃を払いながら、眼を細めて、母は海を見た。

私は蓮根の天麩羅を食うてしまつて、雁木の上の露店で、プチプチ章魚の足を揚げている、揚物屋の婆さんの手元を見ていた。

「いやしかのう、この子は……腹がばりさけても知らんぞ」

「章魚の足が食いたかなア」

「何云いなはると！ お父さんやおツ母さんが、こぎやん貧乏しよるとが判らんな！」
遠いところで、父の風琴が風に吹かれてる。

「汽車へ乗ったら、またよかもの食わしてやるけに……」

「いんにや、章魚が食いたか！」

「さつち、そぎやん、困らせよつとか？」

母は房のついた縞の財布を出して私の鼻の上で振って見せた。

「ほら、これでも得心のいかぬか！」

薄い母の掌に、緑の粉を吹いた大きい式錢銅貨が二三枚こぼれた。

「白か錢は無かろうが？ 白かとがないと、章魚の足は買えんとぞ」

「あかか錢じや買えんな？」

「この子は！ さつち、あげんこツウ、お父さんや、おツ母さんが食えんでも、めんめが腹ばい肥やしたかなア」

「食いたかもの、仕様がなかじやなつか！」

母はピシツと私のビンタを打った。学校帰りの子供達が、渡し船を待っていた。私が殴られるのを見ると、子供達はドツと笑った。鼻血が咽へ流れて来た。私は青い海の照り返りを見ながら、塩っぱい涙を啜った。

「どこさか行つてしまいたい」

「どこさか行く云うても、お前がどのような意地っぱりは、人が相手にせんと……」

「相手にせんちゃよか！ 遠いところ、一人で行つてしまいたか」

「お前は、めんめさえよければ、ええとじやけに、バナナも食うつろが、蓮根も食いよつて、富限者の子供でも、そげんな食わんぞな！」

「富限者の子供は、いつも甘美かもの食いよつとじやもの、あぎゃん腐ったバナナば、恩にきせよる……」

「この子は、嫁様にもなる年頃で、食うこツばかり云いよる」

「ぴんたば殴るけん、ほら、鼻血が出つろうが……」

母は合財袋の中からセルロイドの櫛を出して、私の髪をなでつけた。私の房々した髪は櫛の齒があたるたびに、パラパラ音をたてて空へ舞い上った。

「わんわんして、火がつきや燃えつきそうな頭じゃ」

櫛の齒をハーモニカのように口にこすつて、唾をつけると、母は私の額の上の捲毛をなでつけて云つた。

「お父さんが商売があつてみい、何でも買うてやるがの……」

3 私 は 背 中 の 荷 物 を 降 ろ し て も ら つ た 。

紫の風呂敷包みの中には、絵本や、水彩絵具や、運針縫いはいつていた。

「風琴ばかり鳴らしよるが、商いがあつたとじやろか、行つてみい！」

私は棧橋を駆け上つて、坂になつた町の方へ行つた。

町が狭隘いせいか、犬まで大きく見える。町の屋根の上には、天幕がゆれていて、桜の簪を差した娘達がゾロゾロ歩いていた。

「ええ——ご当地へ参りましたのは初めてでござりますが、当商会はピンツケをもつて臺の膏薬かなんぞのようなまやかしものはお売り致しませぬ。ええ——おそれおおくも、××宮様お買い上げの光榮を有しますところの、当商会の薬品は、そこにもある、ここにもあると云う風なものとは違ひまして……」

蟻ありのような人だかりの中に、父の声が非常に汗あせばんで聞えた。

漁師の女が胎毒たいどくくた下しを買った。桜の簪を差した娘が貝殻かいがらへはいった目薬を買った。荷揚げの男が打ち身の膏薬を買った。ピカピカ手ずれのした黒い靴かばんの中から、まるで手品のように、色んな変った薬を出して、父は、輪をつくった群集の眼の前を近々と見せびらかして歩いた。

風琴は材木の上に転がっている。

子供達は、不思議な風琴の鍵キイをいじくっていた。ヴウ！ ヴウ！ この様に、時々風琴は、突拍子とつびようしな音を立てて肩をゆする。すると、子供達は豆まめのように弾はじけて笑った。私は占領せんりようされた風琴の音を聞くと、たまらなくなつて、群集の足をかきわけた。

「ええ——子宮、血の道には、このオイチニイの薬ほど効くものはござりませぬ」

私は材木の上に群れた子供達を押しのけると、風琴を引き寄せて肩に掛けた。

「何しよつと！ わしがとじやけに……」

子供達は、断髪だんぱつにしている私の男の子のような姿を見ると、

「散剪さんぎり、散剪り、男おなごやアイ！」と囃はやしたてた。

父は古ぼけた軍人帽子ぼうしを、ちよいとなおして、振りかえつて私を見た。

「邪魔じゃましよつとじやなか！ 早はようおツ母さんのところへ、いんじよれ！」

父の眼が悲しげであつた。

子供達は、また蠅はえのように風琴のそばに群れて白い鍵キイを押した。私は材木の上を縄渡なわわたりのようにタツタツと走ると、どこかの町で見た曲芸の娘のような手振りで腰こしを揉もんだ。

「帯がとけとるどウ」

竹馬を肩にかついだ男の子が私を指差した。

「ほんま？」

私はほどけた帯を腹の上で結ぶと、裾すそを股またにはさんで、キュツと後にまわして見せた。

男の子は笑っていた。

白壁の並んだ肥料倉庫の広場には針のように光った干魚が山のように盛りも上げてあつた。その広場を囲んで、露店のうどん屋が鳥のように並んで、仲士達が立ったまま、つるつるとうどんを噉くはっていた。

露店の硝子箱ガラスばこには、煎餅せんべいや、天麩羅がうまそうであつた。私は硝子箱硝子箱に凭もたれて、煎餅と天麩羅をじつと覗のぞいた。硝子箱の肌はだには霧がかかつていた。

「どこの子なア、そこへ凭れちやいけんがのう！」

乳房を出した女が赤ん坊の鼻汁を吸りながら私を叱った。

4 山の朱い寺の塔に灯がとぼった。島の背中から鰯雲が湧いて、私は唄をうたいながら、波止場の方へ歩いた。

棧橋には灯がついたのか、長い竿の先きに籠をつけた物売りが、白い汽船の船腹をかこんで声高く叫んでいた。

母は待合所の方を見上げながら、棧橋の荷物の上に凭れていた。

「何ぼしよつたと、お父さん見て来たとか？」

「うん、見て来た！ 山のごツ売れよつた」

「ほんまな？」

「ほんま！」

私の腰に、また紫の包みをくくりつけてくれながら、母の眼は嬉し気であった。

「ぬくうなつた、風がぬるぬるしよる」

「小便がしたか」

「かまうこたなか、そこへせいよ」

棧橋の下にはたくさん藻や塵芥が浮いていた。その藻や塵芥の下を潜って影のような魚がヒラヒラ動いている。帰つて来た船が鳩のように胸をふくらませた。その船の吃水線に潮が盛り上ると、空には薄い月が出た。

「馬の小便のごつある」

「ほんでも、長いこと、きばつとつたとじゃもの」

私は、あんまり長い小便にあいそをつかしながら、うんと力んで自分の股間を覗いてみた。白いプクプクした小山の向うに、空と船が逆さに写っていた。私は首筋が痛くなるほど身を曲めた。白い小山の向うから霧を散らした尿が、キラキラ光って棧橋をぬらしている。

「何しよるとじやろ、墜ちたら知らんぞ、ほら、お父さんが戻つて来よるが」

「ほんまか？」

「ほんまよ」

股間を心地よく海風が吹いた。

「くたびれなはったろう？」

母がこう叫ぶと、父は手拭で頭をふきながら、雁木の上の方から、私達を呼んだ。

「うどんでも食わんか？」

私は母の両手を握って振った。

「嬉しいか！ お父さん、山のごつ売ったとじやろなア……………」

私達三人は、露店のバンコに腰をかけて、うどんを食べた。私の丼の中には三角の油揚げが入っていた。

「どうしてお父さんのも、お母さんのも、狐がはいっとらんと？」

「やかましいか！ 子供は黙って食うがまし……」

私は一片の油揚げを父の丼の中へ投げ入れてニヤツと笑った。父は甘美そうにそれを食べた。

「珍しかとじやろな、二三日泊って見たらどうか」

「初め、癩兵じやろう云いよつたが、風琴を鳴らして、ハイカラじや云う者もあった」

「ほうな、勇ましか曲をひとつたつ、聴かしてやるとよかったに……」

私は、残ったうどんの汁に、湯をゆらゆらついで長いこと乳のように吸った。

町には輪のように灯がついた。市場が近いのか、頭の上に平たい桶を乗せた魚売りの女

達が、「ばんより！　ばんよりはいりやんせんか」と呼び売りしながら通って行く。

「こりや、まあ、面白かところじや、汽車で見たりや、寺がおそろしく多かつたが、漁師も多かもん、薬も売れようたい」

「ほんに、おかしか」

父は、白い銭をたくさん数えて母に渡した。

「のう……章魚の足が食いたかア」

「また、あげんこツ！　お父さんな、怒おこんなさつて、風琴ば海さ捨てる云いなはるばい」

「また、何、ぐずつちよるとか！」

父は、豆手帳の背中から鉛筆えんぴつを抜ぬいて、薬箱の中と照し合せていた。

5　夜になると、夜桜を見る人で山の上は群った蛾がのように賑にぎわった。私達は、駅に近い線路ぎわのはたごに落ちついて、汗ばんだまま腹這っていた。

「こりやもう、働きどうの多い町らしいぞ、桜を見ようとてお前、どこの町であぎやん賑おうとったか？」

「狂人どうが、何が桜かの、たまげたものじや」

別に気も浮かぬと云った風に、風呂敷包みをときながら、母はフンと鼻で笑った。

「ほう、お前も立つて、ここへ来てみいや、綺麗かぞ」

煤すすけた低い障しょうじ子こを開けて、父は汚れたメリヤスのパッチをぬぎながら、私を呼んだ。

「寿司すしば食いとうなるけに、見とうはなか……」

私は立とうとしなかった。母はクツクツと笑っていた。腫物はれもののようにぶわぶわした畳たたみの上に腹這つて、母から読本とくほんを出してもらうと、私は大きい声を張りあげて、「ほごしよく」の一部を朗読し始めた。母は、私が大きい声で、すらすらと本を読む事が、自慢じまんでもあるのであろう。「ふん、そうかや」と、度々優しく返事をした。

「百ひやくしやう姓せうは馬鹿ばかだな、尺取虫しやくとりむしに土瓶どびんを引っかけるてかい？」

「尺取虫が木の枝えだのごつあるからじやろ」

「どぎゃん虫かなア」

「田舎いなかへ行くとよくある虫じや」

「ふん、長いとじやろ？」

「蚕かいこのごつある」

「お父さん、ほんまに見たとか？」

「ほんまよ」

汚点^{しみ}だらけな壁に童子のような私の影が黒く写った。風が吹き込むたび、洋燈^{ラング}のホヤの先きが燃え上って、誰^{だれ}か「雨が近い」と云いながら町を通っている。

「まあ、こんな臭か部屋^{へや}、なんぼうにきめなはった？」

「泊るだけでよかもの、六拾錢たい」

「たまげたなア、旅はむごいものじゃ」

あんまり静かなので、波の音が腹に這入って来るようだ。蒲団^{ふとん}は一組で三枚、私はいつものように、読本を持ったまま、沈黙^{だま}って裾へはいって横になった。

「おツ母さん！ もう晩な、何も食わんとかい？」

「もう、何ちやいらんとツ、蒲団にはいったら、寝^ねないかんとツ」

「うどんば、食べたじやろが？ 白か錢ばたくさん持つちよって、何も買うてやらんげに思うちよるが、宿屋も払うし、薬の問屋^{とんや}へも払うてしまえば、あの白か錢は、のうなってしまうがの、早よ寝て、早よ起きい、朝いなったら、白かまんまいっぱい食べさすツでなア」

座蒲団を二つに折つて私の裾にさしあつてはいると、父はこう云つた。私は、白かままと云う言葉を聞くと、ポロポロと涙があふれた。

「背丈が伸びる頃ちうて、あぎやん食いたかものじやろうかなア」

「早よウ、きまつて飯が食えるようにならな、何か、よか仕事はなかじやるか」
父も母も、裾に寝ている私が、涙を流していると云う事は知らぬ氣であつた。

「あれも、本ばよう読みよるで、どこかきまつたりや、学校さあげてやりたか」

「明日、もう一日売れたりや、ここへ坐つてもええが……」

「ここはええところじや、駅へ降りた時から、氣持ちが、ほんまによかつた。ここは何ちうてな？」

「尾の道よ、云うてみい」

「おのみち、か？」

「海も山も近い、ええところじや」

母は立つて洋燈を消した。

6 この家の庭には、石榴ざくろの木が四五本あった。その石榴の木の下に、大きい囲いの浅い井戸いどがあった。二階の縁えんの障子をあけると、その石榴の木と井戸が真下に見えた。井戸の水は塩分を多分に含ふくんで、顔を洗うと、ちよつと舌が塩っぱかった。水は二階のはんど甕がめの中へ、二日分位汲くみ入れた。縁側には、七輪や、馬穴バケツや、ゆきひらや、鮑あわびの植木鉢や、座敷ざしきは六畳じようで、押入れもなければ床とこの間まもない。これが私達三人の落ちついた二階借りの部屋の風景である。

朝になると、借りた蒲団の上に白い風呂敷を掛けた。

階下は、五十位の夫婦ふうふもの者で、古ぼけた俵くろまをいつも二台ほど土間に置いていた。おじさんが、俵をひっぱった姿は見た事はないが、誰かに貸すのであろう、時々、一台の俵が消える時がある。おばさんは毎日、石榴の木の見える縁側で、白い昆布こんぶに辻占つじうらを巻いて、帯を結ぶ内職をしていた。

ここの台所は、いつも落莫らくばくとして食物らしい匂においをかいだ事がない。井戸は、囲いが浅いので、よく猫や犬が墜おちた。そのたび、おばさんは、禿はげの多い鏡を上から照らして、深い井戸の中を覗いた。

「尾の道の町に、何か力があつとじやろ、大阪おおさかまでも行かいでよかつた」

「大阪まで行つとれば、ほんのこて今頃は苦勞しよつとじやろ」

この頃、父も母も、少し肥えたかのように、私の眼にうつった。

私は毎日いっぱい飯を食った。嬉しい日が続いた。

「腹が固うなるほど、食うちよれ、まんまさえ食うちよりや、心配なか」

「のう——おツ母さん！ 階下のおばさんたち、飯食うちよるじやろか？」

「どうして？ 食うちよらな動けんかの」

「ほんでも、昨夜な、便所へはいつちよつたら、おじさんが、おばさんに、俵も持つて行かせ、俺は^{おれ}このまま死んだ方がまし、云うてな、泣きよんなはつた」

「ほうかや！ あの俵も金貸しにばし、取られなはつたとじやろ」

「親類は、あつとじやろか、飯食いなはるとこ、見たことなか」

「そぎやんこツ云うもんじやなかツ、階下のおじさんな、若い時船へ乗りよんなはつて、機械で足ば折んなはつたとオ、誰つちや見てくれんけん、おばさんが昆布巻きするきりで、食うて行きなはるとだい、可哀^{かわい}そうだろうがや」

「警察へ行つても駄^だ目かや？」

「誰もそんな事知らんと云うて、皆^{みな}、笑いまくるぞ」

「それでも、悪いこつすれば怒るだろう？」

「誰がや？」

「人の足折って、知らん顔しちよるもんがよ才」

「金を持ちちよるけに、かなわんたい」

「階下のおじさんな、馬鹿たれか？」

「何ば云よつとか！」

父は風琴と弁当を持って、一日中、「オイチニイ オイチニイ」と、町を流して薬を売って歩いた。

「漁師町に行つてみい、オイチニイの薬が来たいうて、皆出て来るけに」

「ふうてい風体が珍しかけにな」

長いこと晴れた日が続いた。

山では桜の花が散つて、いつせいにあたり四囲が青ばんで来た。

遠くで初はつがえる蛙も啼いた。白い除虫菊じょちゅうぎくの花も咲いた。

7 「学校へ行かんか？」

ある日、山の茶園で、薔薇ばらの花を折って来て石榴の根元に植えていたら、商売から帰った父が、井戸端いどばたで顔を洗いながら、私にこう云った。

「学校か？ 十三にもなつて、五年生にはいるものはなかもの、行かぬ」

「学校へ行つとりや、ええことがあるに」

「六年生に入れてくれるかな？」

「沈黙だまつとりや、六年生でも入れようたい、よう読めるとじゃもの……」

「それでも、算術はむずかしかるな？」

「ま、勉強せい、明日は連れて行つてやる」

学校に行けることは、不安なように嬉しい事であつた。その晩、胸がドキドキして、私は子供らしく、いつまでも瞼まぶたの裏に浮んで来る白い数字を数えていた。

十二時頃でもあつたであらうか、ウトウトしかけていると、裏の井戸で、重石おもしか何か墜ちたように凄まじい水音がした。犬も猫も、井戸が深いので今までは墜ちこんでも嘗め

るような水音しかないのに、それは、聞き馴れない大きい水音であつた。

「おツ母さん！ 何じやろか？」

「起きとつたか、何じやろかのう……」

そう話しあっている時、また水をはねて、何か悲しげな叫び声があがつた。階下のおじさんが、わめきながら座敷を這っている。

「あんた！ 起きまつせ！ 井戸ん中へ誰か墜ちたらしかッ」

「誰が？」

「起きて、早よう行つてくれまつせ、おばさんかも判らんけに……」

私は体がガタガタ震えて、もう、ものが云えなかった。

「どぎやんしたとじやろか？」

「お前も一緒に來いや、こまい者は寝とらんかッ！」

父は唸鳴りながら梯子段を破るようにドンドン降りて行つた。

私一人になると、周囲から空気が圧して來た。私はたまらなくなつて、雨戸を開き、障子を開けた。

石榴の葉が、ツンツン豆の葉のように光つて、山の上に盆のような朱い月が出ている。

肌の上を何かついと走った。

「どぎゃん、したかアい！」

思わず私は声をあげて下へ叫んでみた。

母が、鏡と洋燈を持つてているのが見えた。

「ハイ！ この縄を一生懸命握つとんない」

父はこうわめきながら、縄の先を、真中の石榴の幹へ結んでいた。

「いま、うちで、はいますにな、辛抱して、縄へさばつといて下さいや」

おろおろした母の声も聞えた。

「まさこ！ 降りてこいよッ」

父は覗いている私を見上げて呶鳴った。私は寒いので、父の、黄色い筋のはいつた服を背中にひっかけると、転ぶように井戸端へ降りて行った。縁側ではおじさんが「うははははうはははははは」と、泡を食ったような声で呶鳴っていた。

「ええ子じゃけに、医者へ走って行け、おとなしう云うて来るんぞ」

石畳の上は、淡い燈のあかりでぬるぬる光っていた。温い夜風が、皆の裾を吹いて行く。井戸の中には、幾本も縄がさがつて「ううん、ううん」唸り声が湧いていた。

「早よう行つて来ぬか！ 何しよつとか？」

私は、見当もつかない夜更けよふの町へ出た。波と風の音がして、町中、腥なまぐさい臭においが流れていた。小満しょうまんの季節らしく、三味線しゃみせんの音のようなものが遠くから聞えて来る。

いつから、手を通していたのであるうか、首のところで、釦ボタンをとめて、私は父の道化どうけた憲兵の服を着ていた。そのためだろうか、街角の医者いしやの家を叩くと、俵夫しゃふは寝呆ねぼけて私がいまだかつて、聞いた事がないほどな丁寧ていねいな物言いで、いんぎんに小腰を曲めた。

「よろしうござりますとも、一時でありましようとも、二時でありましようとも、医者いしやの役目やくめでござります故、私さえ走るならば、先生も起きましようし、じき、上りまするでござります」

8 井戸へ墜ちたおばさんは、片手にびしよびしよの風呂敷包みを抱だいて上つて来た。その黒い風呂敷包みの中には襦子しゆすの鯨くじら帯おびと、おじさんが船乗り時代に買ったという、ラッコの毛皮の帽子がはいっていた。おばさんは、夜更けを待って、裏口から質屋へ行く途とちゆう中ちゆうでもあったのであろう。おばさんの帯の間から質屋の通いがおちた。母は「この

ひとも苦勞しなはる」と、思つたのか、その通いを、医者の見ぬように隠した。

「あぶないところであつた」

「よかりましようか？」

「打身をしとらぬから、血の道さえおこらねば、このままでよろしかろ」

一度は食べてみたいと思つたお婆さんの、内職の昆布が、部屋の隅に散乱していた。五ツ六ツ私は口に入れた。山椒がヒリツと舌をさした。

「生きてあがつたとじゃから、井戸浚えもせんでよかろ」

朝、その水で私達は口をガラガラ嗽いだ。井戸の中には、お婆さんの下駄が浮いていた。私は禿げた鏡を借りて来て、井戸の中を照らしながら、下駄を箆で引きあげた。母は、石囲いの四ツ角に、小さい盛塩をして「オンバラジャア、ユウセイソワカ」と掌を合しておがんだ。

曇り日で、雨らしい風が吹いている。

父は、着物の上から、下のおじさんの汚れた小倉の袴をはいて、私を連れて、山の小学校へ行つた。

小学校へ行く途中、神武天皇を祭った神社があった。その神社の裏に陸橋があつて、下を汽車が走っていた。

「これへ乗って行きやア、東京まで、沈黙^{だま}つちよつても行けるんぞ」

「東京から、先の方は行けんか？」

「夷^{えびす}の住んどるけに、女子供は行けぬ」

「東京から先は海か？」

「ハテ、お父さんも行つたこたなかよ」

随分^{ずいぶん}、石段の多い学校であつた。父は石段の途中で何度も休んだ。学校の庭は沙漠^{さばく}のように広がつた。四隅^{よすみ}に花壇^{かだん}があつて、ゆすらうめ、鉄線蓮^{てっせんれん}、おんじ、薊^{あざみ}、ルピナス、躑躅^{つじ}、いちはつ、などのようなものが植えてあつた。

校舎の上には、山の背が見えた。振り返ると、海が霞^{かす}んで、近くに島がいくつも見えた。
「待つとれや」

父は、袴の結び紐^{ひも}の上に手を組んで、教員室の白い門の中へはいつて行つた。——よつぽど柳には性のあつた土地と見えて、この庭の真中にも、柔かい芽を出した大きい、柳の木が一本、羊のようにフラフラ背を揺^ゆつていた。

廻旋木^{かいせんぼく}にさわってみたり、遊動円木に乗ってみたり、私は新しい学校の匂いをかいだ。だが、なぜか、うつとうしい気持ちが出ていた。このまま走って、石段を駈^かけ降りようかと、学校の門の外へ出たが、父が、「ヨオイ！」と私を呼んだので、私は水から上った鳥のように身震いして教員室の門をくぐった。

教員室には、二列になって、カナリヤの巢^すのような小さい本箱が並んでいた。真中に火鉢があつた。そこに、父と校長が並んでいた。父は、私の顔を見ると、いんぎんにおじぎをした。だから、私も、おじぎをしなければならぬのだらうと、丁寧に最敬礼をした。校長は満足気であつた。

「教室へ連れて行きましょう」

「ほんなら、私はこれで失礼いたします。何ともハヤ、よろしくお願い申し上げます」
父が門から去ると私は悲しくなつた。校長は背の高い人であつた。私はどこかの学校で覚えた、「七尺下^{さが}つて師の影を踏^ふまず」と、云う言葉を思い出したので、遠くの方から、校長の後へついて行つた。

「道草食わずと、早よう歩かんか！」

校長は振り返つて私を叱つた。窓の外のポンプ井戸の水溜^{みずたま}りで、何かカロカロ……鳴

いていた。

雨戸のような歪ゆがんだ扉とびらを開けると、ワアンと子供達の息が私にかかった。（女子六年イ組）と、黒板の上に札ふだが下っていた。私は五年を半分飛ばして六年にあがる事が出来た。ちよつと不安であつた。

9 長い間雨が続いた。

私はだんだん学校へ行く事が厭いやになつた。学校に馴なれると、子供達は、寄つてたかつて私の事を「オイチニイの新馬鹿大将の娘じゃ」と、云つた。

私はチャップリンの新馬鹿大将と、父の姿とは、似つかないものだと思つていた。それ故、私は、いつか、父にその話をしようと思つたが、父は長い雨で腐り切つていた。

黄色い粟飯あわめしが続いた。私は飯を食べるごとに、厩うまやを聯想れんそうしなければならなかつた。

私は学校では、弁当を食べなかつた。弁当の時間は唱歌室にはいつてオルガンを鳴らした。私は、父の風琴の譜ふで、オルガンを上手に弾ひいた。

私は、言葉が乱暴なので、よく先生に叱なられた。先生は、三十を過ぎた太つた女のひと

であつた。いつも前髪の大きい^{ひさし}庇から、^{ぞうきん}雑巾のような^{けたば}毛束を覗かしていた。

「東京語をつかわねばなりませんよ」

それで、みんな、「うちはね」と云う美しい言葉を使い出した。

私は、それを時々失念して、「わしはね」と、云つては皆に^{ちようしやう}嘲笑された。学校へ行くと、見た事もない美しい花と、石版絵がたくさん見られて楽しみであつたが、大勢の子供達は、いつまでたつても、私に対して、「新馬鹿大将」を^や止めなかつた。

「もう学校さ行きとうはなか？」

「小学校だきや出とらんな、おッ母さんば見てみい、本も読めんけん、いつもかつも、^{ねむ}眠つとろうがや」

「ほんでも、うるそうして……」

「何がうるさかと？」

「云わん！」

「云わんか？」

「云いとうはなか！」

刀で^き剪りたくなるほど、雨が毎日毎日続いた。階下のおばさんは、毎日昆布の中に辻占

と山椒を入れて帯を結んでいた。もう、黄いろいご飯も途絶え勝ちになった。母は、階下のおばさんに荷札に針金を通す仕事を探してもらった。父と母と競争すると母の方が針金を通すのは上手であつた。

私は学校へ行くふりをして学校の裏の山へ行つた。ネルの着物を通して山肌がくくんくん匂っている。雨が降つて来ると、風呂敷で頭をおおうて、松の幹に凭れて遊んだ。

天気の良い日であつた。山へ登つて、萩の株の蔭へ寝ころんでいたら、体操の先生のように髪を長くした男が、お梅さんうめと云う米屋の娘と遊んでいた。恥ずかしい事だと思つたのか私は山を降りた。真珠色しんじゆいろに光つた海の色が、チカチカ眼をさした。

父と母が、「大阪の方へ行つてみるか」と云う風な事をよく話した。私は、大阪の方へ行きたくないと思つた。いつの間にか、父の憲兵服も無くなつていた。だから風琴がなくなつた時の事を考えると、私は胸に塩が埋うまつたようで悲しかった。

「俵でも引っぱつてみるか？」

父が、腐り切つてこう云つた。その頃、私は好きな男の子があつたので、なんぼうにもそれは恥ずかしい事であつた。その好きな男の子は、魚屋のせがれであつた。いつか、そ

の魚屋の前を通っていたら、知りもしないのに、その子は私に呼びかけた。

「魚が、こぎやん、えつと、えつと、釣れたんどう、一尾やろうか、何がええんな」

「ちぬご」

「ちぬごか、あぎやんもんがええんか」

家の中は誰もいなかった。男の子は鼻水をずるずる吸りながら、ちぬごを新聞で包んでくれた。ちぬごは、まだぴちぴちして鱗が銀色に光っていた。

「何枚着とるんな」

「着物か？」

「うん」

「ぬくいけん何枚も着とらん」

「どら、衿を数えてみてやろ」

男の子は、腥い手で私の衿を数えた。数え終ると、皮剥ぎと云う魚を指差して、「これも、えつとやろか」と云った。

「魚、わしや、何でも好きじやんで」

「魚屋はええど、魚ばア食える」

男の子は、いつか、自分の家の船で釣りに連れて行ってやると云った。私は胸に血がこみあげて来るように息苦しきを感じた。

学校へ登る日行ってみたら、その子は五年生の組長であった。

10 誰の紹介であつたか、父は、どれでも一瓶拾銭の化粧水を仕入れて来た。青い瓶もあつた。紅い瓶も、黄いろい瓶も、みな美しい姿をしていた。模様には、ライラツクの花がついて、きつく振ると、瓶の底から、うどん粉のような雲があがつた。

「まあ、美しか！」

「拾銭じゃ云うたら、娘達や買いたかる」

「わしでも買いたか」

「生意気なこと云いよる」

父はこの化粧水を売るについて、この様な唄をどこからか習つて来た。

一瓶つければ桜色

二瓶つければ雪の肌

諸君！ 買いたまえ

買わなきや炭団たどんとなるばかり。

父は、この節に合せて、風琴を鳴らす事に、五日もかかってしまった。

「早よう売らな腐る云いよった」

「そぎゃん、ひどかもん売つてもよかるか？」

「ハテ、良かるか、悪かるか、食えんもな、仕様がなかじやなツか」

尾の道の町はずれに吉和よしわと云う村があつた。帆布工場はんぷもあつて、女工や、漁師の女達がたくさんいた。父はよくそこへ出掛けて行つた。

私は、こういうハイカラな商売は好きだと思つた。私は、赤い瓶を一ツ盗ぬすんで、ほとんど甕の横に隠しておいた。

「時勢が進むと、安うて、ハイカラなものが出来るもんかなア」

町中「一瓶つければ桜色」の唄が流行はやつた。化粧水は、持つて出るたび、よく売れて行つた。

その頃、籠の中へ、牛肉を入れて売つて歩く婆さんが来た。もうけがあるのであろう、

母は気前よく、よくそれを買った。蒟蒻こんにやくを入れると、血のような色になって、「犬の肉でもあつとじやろ」と、三人とも安いのでよく、その赤い肉を食った。

「やっぱし、犬の肉でやんすで」

階下のおばさんは、買った肉を犬にくれたら、やっぱし食わなかったと、それが犬の肉である事を保証した。

雨がカカリと霽はれた日が来た。ある日、山の学校から帰って来ると、母が、息を詰めて泣いていた。

「どきやん、したと？」

「お父さんが、のう……警察い行きなはった」

私は、この時の悲しみを、一生忘れないだろう。通草あけびのように瞼が重くなった。

「おツ母さんな、警察い、ちよつと行つて来ッで、ええ子して待つとれ」

「わしも行く。——わしも云うたい、お父さん帰るごと」

「子供が行つたつちや、おごらるるばかり、待つとれ！」

「うんにや！ うんにや！ 一人じゃ淋さびしか！」

「ビンタばやろかいッ！」

母が出て行つた後、私は、オイオイ泣いた。階下のおばさんが、這い上つて来て、一緒に傍に横になつてくれても、私は声をあげて泣いた。

「お父さんが云わしたばい、あア、おぼつさん！ 戦争の時、罐詰かんづめに石ぶち込んで、成金なつたものもあるとじやもの、俺がとは砂粒すなつぶよか、こまかいことじや云うて……」

「泣きなはん、お父さんは、ちつとも悪うはなかりやん、あれは製造する者が悪いんじやけのう」

「どぎやんしても俺や泣く！ 飯ば食えんじやなつか！」

私は、夕方町の中の警察へ走つて行つた。

唐草からくさ模様のついた鉄の扉に凭れて、父と母が出て来るのを待った。「オンバラジャア、ユウセイソワカ」私は、鉄の棒を握つて、何となく空に祈いのつた。

淋しくなつた。

裏側の水上署でカラカラ鈴すずの鳴る音が聞える。

私は裏側へ廻まわつて、水色のペンキ塗りの歪んだ窓へよじ登つて下を覗いてみた。

電気が煌々こうこうとついていた。部屋の隅に母が鼠ねずみよりも小さく私の眼に写つた。父が、その母の前で、巡查じゆんさにぴしぴしビンタを殴られていた。

「さあ、唄うてみんか！」

父は、奇妙きみょうな声で、風琴を鳴らしながら、

「二瓶つければ雪の肌」と、唄をうたった。

「もつと大きな声で唄わんかッ！」

「ハッハッ……うどん粉つけて、雪の肌いなりやア、安かものじや」

悲しさがこみあげて来た。父は闇雲やみくもに、巡查に、ビンタをぶたれていた。

「馬鹿たれ！　馬鹿たれ！」

私は猿さるのように声をあげると、海岸の方へ走って行った。

「まさこヨイ！」と呼ぶ、母の声を聞いたが、私の耳底には、いつまでも何か遠く、齒車のようなものがギリギリ鳴っていた。

（昭和六年四月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系 69」筑摩書房

1969（昭和44）年

初出：「改造」

1931（昭和6）年4月

入力：土屋隆

校正：林幸雄

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風琴と魚の町

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>